

ルターとアガンベン～生の様式（モード）をめぐって

宮 本 新*

抄 録

イタリアの政治哲学者ジョルジョ・アガンベンはコロナ禍の最奥にある問題としてわたしたちの隣人なるものの廃止や抹消を指摘し、生の縮減に警鐘を鳴らしている。本稿はこのアガンベンの警鐘からルターのベスト書簡を読み直し、二つの災厄に共通するいのちの課題を取り出す試みである。そこでルターが神奉仕、即、隣人奉仕と明確に語る時、祈り、隣人愛、そして奉仕（ディアコニア）といった一連の言葉と共に、宗教道徳一般の教えを繰り返しているわけではない。むしろパンデミック下にある「生の縮減」状態に抗する神学的応答を公開の書簡としている。この脈絡において「神を前に隣人と共に生きる」は、「逃げるか否か」という倫理的選択の基盤となる生とその存在様式（モード）を示唆するものであり、そこで「隣人なるもの」とはただ働きかけられる何かではなく、いのちに内在し働きかける当のものとなる。

Keywords: アガンベン、ルター、パンデミック、ベスト、隣人なるもの

1. はじめに：“炎上”するアガンベン

今、私たちはパンデミックのまっただ中を生きている。そこでパン（すべて/あらゆる）+デモス（人々）からなるパンデミックという言葉には「世界的大流行」という感染の広がりを示す以上の奥行きがあることに思いが至っている。生の様式（モード）が揺らいでいるからだ。これにいち

早く、そして鋭敏に反応した人にイタリアの政治哲学者ジョルジョ・アガンベンがいる。2020年2月、「エビデミックの発明」という刺激的で問題含みのタイトルを付した短評において、イタリア政府が国民の自由を制限する緊急措置は「熱に浮かされた、非合理的な、まったくいわれのないもの」であり、「正真正銘の例外状態を引き起こし、パニックの雰囲気を広めようと手を尽くしている」ものだと酷評した。¹ この短評をはじめとするアガンベンの一連の警鐘はただちにネット上で“炎上”の様相を呈していたが、まもなくして

* Miyamoto, Arata
ルーテル学院大学、日本ルーテル神学校

アガンベンの「剥き出しの生」という生のあり様（モード）にかかわる首尾一貫した主張と乖離していないことへと、人々の注目はシフトしてきた。² その関心は covid-19 への疫学的な観点というよりも、人間の生のあり様に集中しており、それ故に宗教的で神学的な思考領域に接近するものがある。本稿の関心は、そのようなアガンベンの論評を通じて、あらためて疫病とキリスト教神学の考察を進めることにある。

「私たちの社会はもはや剥き出しの生以外の何も信じていない」という状況は、アガンベンによれば、死者の亡骸と埋葬をめぐる政府の対応と、人びとの反応を見ればわかる。³ 生と死は切断されたままにされ、「死者は葬儀を執り行われる権利」を奪われ、「愛しい人の死骸がどうなるのかははっきりしないまま」にされている。その死者はただの死者でない。「愛しい人」の亡骸であり、「私たちの死者」であるのだが、もし生者がこの亡骸を大切に扱うことを断念するならば、それは疫学的制限以上の意味がある。いのち理解の一元化とでもいうべき事態を見るべきであり、それが『ホモ・サケル』以来のアガンベン特有の主張と関係あるものとなる。

この死者の権利をめぐるアガンベンの短評はさらに奥深い問題へと私たちを導いている。死者の葬りがままならないことは、私たち生者間における隣人性が抹消される事態を表している。感染症対策こそが「いのちを守る行動」という考えが序列化され一元化される時、イタリア市民は生物的な生以外の「ほとんどすべてのものを犠牲にする」事態に置かれている、とアガンベンは警告する。「ほとんどすべて」とは、「通常の生活のありかたや社会的関係や労働、さらには友人関係や情愛や宗教的・政治的な信念」のことであり、これはほぼ私たちの日常生活すべてを指していると考えてよいだろう。⁴ そしてアガンベンの論評に立ち止まる意味はこの点をじっくりと考えさせるものであるからだ。パンデミックの緊張状態のもとでは、このようなアガンベンの発言はウィルスの恐ろしさも感染対策が何であるかも知らない、い

わば「よく事態を理解していない老人の勇み足的な文章」と受け取られ、“炎上”した。⁵ しかしながら、もしそれが本当のことであり、事態はアガンベンが思う以上に複雑だというならば、その逆もまた真を表している。パンデミックがもたらした脅威は人間の生命だけではない。そこで守られる“いのち”とは何のことなのか。アガンベンは人が死んで埋葬されることをも含む私たちの日常生活の一片一片は、それがたとえ平凡でいて退屈な営みであったとしても、人間の自由と尊厳にかかせないものであり、人と人とが結びあわされ共感と共生の生の在り処はここにある。この複雑で膨大なスケールを要する「いのち」の諸次元にまつわる一切について、アガンベンはここで「死者の権利」と「わたしたちの隣人性」という二点に極限化して表現しているように思われるし、そこで「いのちを守る行動」の一元化の危うさを“炎上”もろともとせず訴えている。

本稿はこのようなアガンベンのコロナ禍における発言をサーチライトのようにしてペスト禍におけるルター書簡を再読する試みである。キーワードは「死者の埋葬」と「私たちの隣人性」であり、この二つはルターのペスト書簡に見られる共通した注目点となる。アガンベンは「剥き出しの生」の生き残りに集中するあまり「生の縮減」が起こっているコロナ禍において、いのちの多元性が侵食され隣人性の抹消を論じているが、これもまたペスト禍においてルターが見ていた人間の病の実体と重なる点になる。両者にある時代の隔たり、哲学者と神学者、そしてコロナとペストという違いも無視すべきではないが、いずれもがパンデミックをめぐる近似した洞察を示しているので、少なくとも両者を読み比べ検証を試みる価値はあるように思う。これが本稿のねらいである。⁶

以下においてまず、ルターのペスト書簡の概略を述べ（2節）、次にアガンベンの警鐘からあらためてペスト書簡を再読しその結果を考察したい。隣人性をめぐるルターの見解、同じく死者とその埋葬をめぐる発言には相互に関連する問題意識が見られるので、3節においてそれらを4点ほ

どに分けて考えてみたい。そして最後にこのペスト書簡の勧告の骨子は、神を信じ（神信仰）、隣人を愛する（隣人奉仕）という極めて黄金律的な内容かつ疫病下における生の様式（モード）を表しているのだが、そこにはルターの神学的世界観が垣間見られることを指摘しておきたい（4節）。この世界は、たとえ疫病があろうとまたその悲惨さが現実的なものであれ、ここも神の世界であり、ペスト禍にある人々の身体も、身体を癒す薬も、そしてペスト禍においていのちを守るためのあらゆる知性も神の被造性を帯びていることが強調されている。コロナ禍においてアガンベンが「生の縮減状態」という危機を指摘し、いのちを包括的にとらえる視座を訴えているのだが、神学的にいえばそれは被造性を考慮することになり、ルターのいのち理解の多元性が書簡に見られると考えてよい。こうしてペスト書簡の脈絡において、ルターが「身体・薬・理性」の被造性を説く意図は明白である。キリスト者は、パンデミックのある世界から遊離、あるいは隔離されたところにある生ではなく、その世界の一部として生きることが説かれている。神を前に隣人と共に生きる生とは、パンデミック下における生の様式（モード）を再確認していることになる。

2. ペスト書簡について

宗教改革が起こった16世紀のヨーロッパとは、疫病史の観点からいえば「ペスト期」のど真ん中にあたる。⁷ ペストに見舞われ助言を求められたルターは、公開書簡をもってこれに応じている。その内容は疫学的関心よりも、ペスト禍からの「恐れと想像」からなる人間の病に向けられている。⁸ このペスト書簡の執筆の前後、ルター自身がウィッテンベルクでペストの感染流行に遭遇している。一五二七年八月のことである。選帝侯ヨハンはただちにウィッテンベルク大学をイエナに移転し、教授たちを避難させた。ところがルターは町に残り、罹患者や避難できない人たちの牧会に従事したのである。同年、少し遅れることシレジアの宗教改革者ヨハン・ヘスのところにも

ペストは流行し、人々の間に動揺が広がっていた。そこでヘスはルターに助言を求め、それに公開書簡の形式をもって応じたものが「人は死に至る疫病に際会し、逃げるべきか否か」(以下、ペスト書簡)である。⁹ 人がこのようなことを問う場合、逃げては駄目で逃げないことこそが正解だ、と求めて尋ねていることが推測される。逃げなかったルターに尋ねるのだからなおさらのことであろう。ところが表題に反して、ルターはそのような調子で書簡を記してはいない。逃げずに留まることこそが大事だともいっているが、逃げることもまた大切だと述べてもいる。パンデミックに際し、逃げるか逃げないかの二者択一に収れんされる問い方こそが問い直されるべきだ、とその書簡は物語っており、その内容は単純ではない。

第一に、ペスト書簡は神学論文でもなければ、倫理の教科書でもない。キリスト者に向けられた牧会書簡である。「牧会的」とは、ある人がたとえ逃げたとしても牧会的関与が途絶えることはなく、また逃げなかったとしてもその関わりは続くことを見通した書簡である、という意味である。逃げるべきか否かという倫理上の問いに対し、シロクロつけてもなお残された問題が牧会者にはある。そこに立ってルターは、逃げる者にも逃げない者にも共通してなすべきことがあることを助言する。自らの命を託する神に祈ること。そうして自らに向けられた神の召しに応じて考え、その結果として、逃げる場合もあれば、逃げない場合もある。このことはペスト禍において逃げない者への称賛と顕彰と、逃げた者への非難と強制が表裏一体となるスパイラルを断ち切る要になる。

次に、ペスト書簡はこうして逃げるか否かという問いを、「信仰と愛」をめぐる問いかけに思いを向け直すよう勧めている。ルターが見つめていたのは、疫病そのものよりも、「想像と恐れ」を媒介とした人間の病であった。感染症の恐怖からのパニック、疫病に対する無理解からの自暴自棄や利己主義といった無思慮な振る舞い、また「神罰」論や疑似神学による予防・治療への偏見、そして死の恐怖といった様々な人間の病が満ち溢れ

ていた。そこでルターはペスト禍を神罰として受忍し諦観するような考えを斥け、予防もしなければ治療も受けないことこそが信仰の強さだという吹聴を戒めている。むしろこのような事態においてこそ、神信仰と隣人愛を省みる機会とし、冷静な向き合い方を示唆している。すなわち自らの命の行方をいのちの神に祈りゆだね、自分と隣人との健康に配慮することを勧めている。

三番目に、ペスト書簡において牧会的であることは神学的であることを意味する。ヘスたちのような牧師たち、公的職務に就く者、そしてあらゆる間柄を生きる人々と、様々な人々に向けられた牧会書簡の言葉は、一貫したルターの神学的見解に裏付けられている。ルター神学の特色となる万人祭司こと全信徒祭司性や召し（召命）の神学がそれである。逃げる者も逃げない者も、神が共にあり、その境遇において召しだされているものがある。それゆえに、逃げる者にも逃げない者にも、書簡は福音を証言し、神の約束に心を砕くよう、うながしている。

“神を前に、隣人と共に生きる”とは何を意味するのか。ペスト書簡では、ペスト禍という切迫した事態における人々の生の拠り所となり、また事態を切り開く活路となる助言の基礎をなしている。ペスト禍においてもまた、人は祈り、隣人に仕え、そして生と死に向き合う。ここに注意したいことがある。この神を前に隣人と共に生きる生（いのち）とは、お題目としないことはもちろんだが、かといって、“神を信じなさい”、“他人のことも考え親切にいなさい”といった宗教的な教えや道徳の線で書簡を読み解くことはできない。仮にそのように利用したとしても、ルターの意図する反面も汲んだことにならないのではないか。なぜなら、ペスト書簡は、神信仰と隣人奉仕の深層にある、人間の生のあり様を検討し指し示しているからだ。すなわち、神を前にして隣人と共に「生きよう」との呼びかけには、すでに神を前に隣人と共にある生という現実が前提とされているからだ。そうであるから、人は逃げて逃げなくとも神と共にあり、隣人と共生するあり様そのも

のは不変であり、そこに希望を置いて、恵みのみ業を期待することこそが信仰の営みになる。ペスト禍における狂気をはらんだカオスにおいて人を我に返し、本来の自己に戻すのはこのような信仰である。それがいのちの条件を見極め、教会の伝統において手を休め祈ること、み言葉に聴くことに立ち戻り、いわば人間の行為のゼロ地点を設定するような勧告になっている。その原点は神の恵みに立ち戻ることであり、ペスト書簡もまた“恵みのみ”が貫徹した生のあり様を改めて再確認する文書になっている。

3. 神を前に、隣人と共にある生（いのち） “逃げないルター”の革新性

ペストの流行に見舞われた際、ルターが町に残ったのは市井の人々に牧会職務を遂行するためであった。そこで家族と暮らす旧修道会の住まいにチャプレンであるブーゲンハーゲン一家を招き、罹患者らを引き受け世話をし、牧会のベースキャンプにしたのである。後にルターは当時のことを、「自分のいのちを隣人のために捨てるよう義務付けられている」と感じていたと述べている。¹⁰ このような隣人奉仕（ディアコニア）は、現代ならば各人の自由意志にもとづいたボランティアと理解されるであろうが、ルターは神を前にした召命とそれ故の義務の遂行と見ていたのである。さらに、この奉仕理解と決断が選帝侯の避難命令という“公”と衝突しており、このことが余計に事態を複雑に見せている。「逃げない」ルターは、選帝侯の避難命令からすれば、「いのちを守る行動」から遠ざかっているように見えるが、神を前にする良心という観点からすれば、避難をしないで、自宅である修道院に罹患者を引き受け世話をし、死にゆく者の看取りを行うこともまた「いのちを守る行動」になる。つまり、「いのちを守る行動」にはいろいろあることが目に見える形で現前化していたのである。

ペスト書簡ではこのような「逃げないルター」に合致する信仰の徹底化が見られる。I テモテ 4・

8を引用して、神を信じ神に仕えることは隣人奉仕（ディアコニア）にはほかならないと述べているからだ。¹¹ ここで注意したいのは、この信心、即、隣人奉仕の“即”とは、信心を隣人奉仕と言い換え、同義とし、同化しているわけではない。あくまでも神学的な人間理解の枠組みで理解されるべきところであり、ここにルターのいのちの多元的理解が首肯される原点のようなものが見られる。心臓の鼓動において確かめられる生命の次元とあわせて、「神に生かされるいのちの次元」があり、また「隣人と共にあるいのちの次元」がある。前者はいのちの被造性に注意を向けることになり、後者はいのちの隣人性とでも呼ぶべき共生の生に目を向けることになる。信心、即、隣人奉仕が説かれるとき、守られるべきいのちに隣人性が内蔵されており、そこで奉仕され、大事にされ、守られるいのちとは神に造られ、呼び出される被造性を帯びているものである。このように神のいのち（被造性）といのちの隣人性が一即に語られるところにルター神学の革新性がある。

このようにいのちそれ自体に神と隣人とのかわりを一即に見つめる革新的な観点は、ペスト禍における自らの例外状態を生じさせる理由になる。まずルターが述べているのは、信仰とは他の人たちが罹患しても自分だけが神の手に守られているかのように思い上がること（錯覚）でもなければ、ペストや死をも恐れない勇気を示すことでもない。むしろ自分と隣人の健康に配慮し、予防と治療に余念なく知恵と力を尽くすことこそが信仰にかかわる事柄であると説いて、以下のように勧めている。「薬を用いなさい。助けになるものは、何でも取りなさい。あなたの家、庭、通りをいぶしなさい。必要もないのに人に会ったり、不必要な場所に行ったりすることを避けなさい。病気から回復した人のところに行くのも避けなさい・・・」と。¹² すでに述べたように、このような柔軟で日常的な過ごし方をめぐるルターの発言には、一方からみればどこからどう見ても世俗的で誰にでもわかる言葉になっており、他方でそ

れは神学的熟慮の極限の表現に相当する。身体の健康に配慮する。自らの身体だけでなく、隣人の健康にも配慮（ケア）する。そこには他者への配慮と親切の方向で理解されるべき次元もあるが、そもそも疫病下における健康はお互いの健康が強く依存し合っている事態であるのだから、むしろいのちの隣人性こそが守られるべき視点となる。

次に、ルターはこのようないのちを守る行動を述べた直後に、間髪いれずに個々人に備わっている例外状態をさりりと表明している。「しかし、もし隣人が私を必要とするならば、私は人も場所も避けないで、自由に彼を訪ね、助けます」と。この「しかし」に接続した典型例が、ウィッテンベルクの逃げないルターであった。そして書簡では同様に、牧会職務にある者たちと公的職務にある者たちに、この「しかし」に接続する職業倫理を遵守し責任を果たすよう説いている。つまり、この書簡には逃げるか逃げざるべきかという二項対立に対して、逃げてでも逃げなくともいのちを守る行動があり、神に仕え隣人に奉仕（ディアコニア）することが説かれている。神を前にした良心の義務なるものが人間には備わっており、「私は人も場所も避けないで、自由に彼を訪ね、助けます」という例外状態もまたここで許容されることになる。この例外状態の遂行は、神を前にした良心の自由においてなされるものであり、これが選帝侯の命令という当時の“公”を乗り越えていく理由になる。このような「しかし」をめぐる例外状態と、自由と責任をめぐる問題は、16世紀のペスト禍と同様に、21世紀のコロナ禍においても依然として、古くて新しい課題として据え置かれているのではなかろうか。

神を前に (coram Deo)

～逃げる者も逃げない者も

アガンベンがソーシャルディスタンスについて以下のように述べる時、コロナ禍の緊急措置がもたらした最大の負の側面を示唆している。「誰であろうと、大切な人であろうとも、その人には近づいても触ってもならず、その人と私たちのあい

だには距離を置かなければならない。その距離は一メートルだと言う者たちもいるが、専門家と言われる者たちの最新の勧告によれば、それは4・5メートルでなければならないという（なんと興味深い50センチか！）。私たちの隣人なるものは廃止された¹³。この「隣人なるものの廃止」の発信から6日後の短文ではさらに詳しく、「私たちの隣人なるものは抹消された」と述べている。今度はソーシャルディスタンスのことではない。死者の葬りが言及されており、アガンベンの隣人性が通り一遍のものではないことに気づかされる。人と距離を取らなければならないことを憂い、葬儀が行えないうらみを述べているわけではない。これらを通じて、「剥き出しの生」の一元的な配慮が「人間たちの目を見えなくさせ、彼らを互いに分離するもの」となり、「自由の制限よりも悲しい・・・人間関係の零落」が起こっている。これがアガンベンの診断である。

隣人性の喪失を指摘するアガンベンからあらためてベスト書簡を再読すると、ベスト禍の問題もまた深く隣人問題であることに気づかされる。しかも相当に深いレベルの問題として捉えられており、その隣人問題とは「逃げてよいか、どうか」という倫理的選択に解消したり、他人に善行をなす隣人奉仕（ディアコニア）に単純化してしまうならば、アガンベンからルターに結ばれる線、すなわちいのちをめぐる問題は視野に入ってこないように思われる。なぜならば、それは“やるか、やらないか”の問題になり、もっと言えば、それが関心の的になるとき、“（隣人奉仕を）やったと思えるか、思えないか”の見方の問題に終始するからである。しかしベスト書簡ではむしろその道筋を最初に遮断しているのがルターの意図であったと思われる。なぜなら疫病から逃れたとしても、また逃れないにしても、人にはなおも逃れられない問題として、神を前に生かされているいのちをどう生きるかが問われているからである。この問いから考え直すと、ベスト禍で逃げずにとどまったからといってそれが神を前に隣人と共に生きた証拠になるわけではないし、またベスト禍か

ら逃げたからといって神から逃亡し隣人を見捨てたことになるわけでもない（二重否定）。むしろ逃げて逃げなくとも人には神の恵みがある。すなわち、人は逃げずに留まるところに隣人と共に生きるいのちが見出され、逃れ避難する先にもまた隣人と共にあるいのちがある。いずれも神を前にしたディアコニアの生（いのち）である。それゆえに、逃げる者にも逃げない者にも神学的にいえば絶対肯定の世界が開かれている（二重肯定）。いのちの隣人性に対応するディアコニアとはこのように理解される。¹⁴

このディアコニアを生きる人に不可逆的に備わっているのは、神を前に祈る生である。ルターにとって、逃げる者にも逃げない者にも共通してなすべきことは祈りである。逃げて、逃げなくとも自らの命をゆだねる神に祈ることが第一のことであり、つづいてルターは「隣人に仕えるために死の危機に際して残る」人たちにも、また反対に「逃れる自由を得ている人」に向けても、それぞれに具体的な祈りの言葉を差し出している。¹⁵ こうして、いずれの立場においても祈る言葉が差し出されていることの意義は深い。律法的にいえば祈りはなすべきことでもあるが、福音的に受け止め言い直すならば、逃げて逃げなくとも人間にいつ、どこででも可能性として残されているのが祈ることになる。逃げる者もそうでない者も祈るのは、いずれの者も自らの命の出退が神のもとにあることを確かめているからである。

神を前に、隣人と共にどう生きるか。そこに照準をあわせた祈りとディアコニアがベスト書簡にあらわれたルターの助言である。ベスト禍において、人はベストに感染しても生きるし、感染しなくとも死んでいる事態は起こりうる。このように生と死を包み込むような生のあり様について、人はどこで学び、熟慮を果たすのだろうか。ルターの場合、それが教会であり、み言葉に聞く礼拝であり、牧会者の責務はここから生じることになる。

教会の使命と牧会の務め

アガンベンは疫病下において、「生物学的なありかたへと縮減」された生を見つめている。ここでは、人々の日常なるものも、そして政治的なるものや宗教的なるものも、「ほとんどすべてのこと」として犠牲にさらされている現況を踏まえ、「隣人なるものの抹消」と言い表されている。これらは時代も状況も異なるにもかかわらず、ルター的好い直しが可能になる。ペスト禍で死の世界は身近なものであり、人はそこで教会に集いなくすべきことがある。ルターによれば、それが「み言葉を通して、いかに生き、またいかに死ぬか」を学び、思いめぐらすことであり、教会固有の使命もヨハン・ヘスはじめ牧師たちの職務もこれを基軸とする。¹⁶

このような教会と牧会者の働きにルターが言及する脈絡には、しっかりとメメント・モリの伝統が刻まれており、具体的な勧告がつづいている。牧師が積極的に関与するいのちを守る職務とは、「週に一度は罪の告白をして聖餐を受ける」よう招き実践することにある。そして、「隣人と和解をしておく」ことや、残された者のために「遺志を残す」ことを助言しておくこともまた一連の牧会者の務めとして教え上げられている。ペスト禍とはいえ、ルターの牧会的視点は常に「死」との距離が近く、生と切り離せない関係にある。ここでの教会は、被造世界に反響する神のこぼれを拾い上げる中継地点のような役割であり、神を前に、そして（神の）被造世界において、自らの生死を思いめぐらす「共同の学び舎」のような役割が考えられている。

これらの教会の役割やそこでの牧会職務の内容はこんにちの教会との継続性は認められるものの、ルターの射程が現代のそれと比べて、かなり遠くまで伸びていることに気が付かされる。それはルターが突出しているのではなく、実際には16世紀から500年の時をかけて教会の射程が侵食され縮減されてきた結果というべきかもしれない。いずれにせよここでは、教会に集い、み言葉に聴き、神に祈り、隣人に仕えることは、いずれ

もが、信者の生と死を守り、見つめ、育む一連の道筋として理解されている。このような生と死の臨場感を伴った教会と牧会職務の意義深さは、アガンベンが「むき出しの生」に対置するべく「政治的・宗教的信念」に対応している機能と考えられる。み言葉の礼拝は一方で宗教的で霊的な行為であるが、社会学的観点から捉え直すならば、いのちを守り、隣人性や被造性を含むいのちの多元性に目をむけ、自らのいのちの生かし方を共同で探り出す活動に他ならない。

亡骸・埋葬・墓場

ペスト書簡の追記部分において、ルターはウィッテンベルクの墓場の移転について意見を述べている。当時のウィッテンベルクの墓地は、「市場もあり人通りの多いところで、墓地ほどに騒がしいところは市中にない」ほどだ、と述べられており、早急に墓地を作りなおすことをルターは提案している。¹⁷ ペストが現在のようにペスト菌による感染症であることなど知る由もない時代のことであり、ルターもまた空気感染やその他に同時代に考えられていた原因を念頭に、疫病予防について発言している。ルターにとって、墓場とはただ亡骸を埋葬する場所ではない。人が「死について、最後の審判、そして復活について思いめぐらす」場所でもある。死者の亡骸は埋葬され、生者は死者を悼む。そこで人は生死貫く神のいのちに差し向いを果たすことになる。そのような場所はあらゆるしがらみから解かれた静かな場所であるべきであり、そこで祈りがささげられる配慮が必要となる。このような諸事を述べてから、さらにルターは個人的な意見であることを断り、エルベ川の岸辺こそが最適な場所である、と具体的な候補地まで挙げている。¹⁸ 一見、まさに追記にふさわしい当時の墓地事情についてルターが意見している程度の内容に思われるが、今回の再読において改めて注目したいことがある。

アガンベンは短評において遺族が死者を埋葬する権利が篡奪された、とはいわずに、「死者の権利」といういい方をする。奇妙で戸惑いを覚える

表現でありその真意は定かではない。けれども、ここからルターのベスト書簡を再読するならば、神学的な理解と合致させることは可能である。むしろ、ルターの方も「死者の権利」という言い方はしないものの、そこで生と死は別々の事柄でありながら、同時に一連のいのちの出来事として、ひとつのまとまりを見せて語られている。生も死も神のいのちにあずかる者の出来事として連続したものとみなされている。そこで、これまで見てきたような生者の感染予防について語り、自分と隣人の健康と生命を配慮することの大切さを説いていることにつづいて、死と埋葬、そして墓場についてルターが述べているその仕方について改めて注目したい。

ベスト書簡には生と死が断絶し対立している部分と、生と死が一連の出来事とみなされている部分がある。そこから「死者の権利」を考えなおすならば、少なくとも神学的には、奇妙なことでもなければ、戸惑うことでもないことになる。ベスト禍におけるルターは、死にゆく人々への牧会、愛する人を亡くした人々の慰めと魂の配慮、そして埋葬とその葬りの場所の整備などは、教会的にも牧会的にも、そして本人たちにおいても、生と死をまたいだ一連のいのちの出来事に属する。ルターは予防と治療に知性を尽くすことの大切さを説き、生者に「私たちが神様に委託されていることは、身体が不要に傷ついたり傷められることのないように、身体をも気遣い世話すること、そしてそれを守ること」と述べているが、この神学的観点に立つならば、それは死者に対しても連続しておよんでいる助言となる。¹⁹

生と死あわせて享受する人の一生とそこでの出来事は、いずれも神のことばの出来事となり、すべては神の被造世界において起こっている事柄であるからだ。そこで疫病の予防と治療、そして自他の健康の配慮は、亡骸・埋葬・墓場といった死の事柄と切り離されてはならず、むしろ一連の出来事として扱われている。生者への配慮（ケア）は死者への配慮（ケア）において止むこと理由はここで見当たらない。なぜならその人のいのち

と存在の一連の出来事の二つの側面が生と死であり、片方の制限は実はもう片方の制限につながる。アガンベンがいう「生物学的なありかたへと縮減」された生の現実と「隣人性の抹消」が同時に語られるロジックは、このルターの神学的見方と重なりあっているように思われる。ただしルターにおいて、生と死の一連の連続性は、神のことばへの信頼において保たれるものであって、あくまでも信仰を軸にして論じられていることもまた見逃せない点となる。

4. 世界の被造性

アガンベンの警鐘をサーチライトのようにしてルターのベスト書簡を読み直すならば、以上のようにその勧告が「信仰と愛」を念頭に、神を前に隣人と共いきる生の様式（モード）を提示する内容となっていることが確認された。そこではいのちが包括的な広がりと多元的な意味の層を伴うものとして理解されている。生物的生命だけでなく、他者と共に生きて生かされるいのち、神のいのちを生きるいのち、この関係性においていのちが捉えられている。この関係概念としてのいのち理解に対応して、神信仰が徹底されると隣人愛に結びつき、それが隣人奉仕（ディアコニア）の形となり、自他ともにあるいのちを守る行動となる。同様に、文字通りその連続性において、「わたしたちの死者」も見つめられており、埋葬を通じ、生者は死者と共に神のいのちを思いめぐらす機会となる。このようなルターの「死・亡骸・埋葬」をめぐる発言の真意は、生者と死者のいのちが神と共にあることを信頼し、ベスト禍の現世を生き抜く励ましにある。この励ましの奉仕において重要な役割を担うのが教会であり、牧師たちである。

このような勧告の背景にはルターの世界観とでもいべきものが垣間見られる。この世界は、このような疫病と凄惨な死があるにもかかわらず、なおも神が造られ導く神の世界であり、ここにあるものは神の被造性を帯びているものとみなされている。書簡では特に身体、薬、知性をめぐりそ

これらの被造性が言及されているが、その意とすることはこの世と物質と人間なるものの偶像化でもなければ魔術化でもない。たとえペスト禍の苛烈な生死が現実であっても、私たちの生と死の舞台たるこの世界は神の被造世界であり、いのちを守る事柄は被造物の保全にかかわる事柄である。人はこれを神のこぼれを通して学び、またそこに希望を見出す。このようなペスト書簡における世界観からこんにちのコロナ禍における私たちに語りかけてくる意義について少し考えてみたい。

恵みと自然世界

1961年、インドのニューデリーで開催された第三回世界キリスト教協議会（WCC）総会において、ルター派の神学者ジョセフ・シトラーはプロテスタント教会、とりわけ啓蒙主義以降の神学が、「恵みと自然」について十分に考えるにいたっていない現状を指摘している。このシトラーに注目する理由はエコロジーと神学の先駆的取り組みだけでなく、それがルターの恵みへの集中とその射程を現代的によみがえらせる教理的チャレンジでもあるからだ。²⁰ 例えば、こんにちの私たちが宗教改革の旗印となった標語、「恵みのみ」を思い浮かべるとき、そこで連想されているものは救済論的発想であり、その具体化は「歴史」と「道徳」に結び合わされている。神はこの世界の「歴史」を通じてご自身を現わされ恵みの御業をなされるし、また「道徳」というときに、人の心や人格に働きかける恵みが神学的に考察される。別言すれば、恵みの宣教は社会における宣教の可能性を切り開き具体化する。もちろんそれ自体に何の問題もないが、恵みの広がり社会化以上のものであることをシトラーは指摘している。なぜなら、神の恵みは神の被造世界にむけられているのであって、そこでの神学的な対応概念は、社会ではなく世界にあるからだ。

この講演はWCCがエコロジーをその議題とするひと世代前になされた点において画期的であり、歴史的な講演となった。歴史の神、人間の心と生き方に働きかける神の恵みだけでなく、被造

世界を造り、守り、導く神に注目し、この被造世界における人間の応答的な責任と教会の使命が問いかけている。「神」とは歴史の神であり、人間の心と魂に働きかける神であるだけでなく、「光あれ」と創造の業をおこし、被造物の「うめき」に響き合うて共に働く神である。シトラーは神-人の神学ではなく、神-人-その他の被造物（自然世界）という三項において神学を展開しようとしている。その三連構造は聖書の読みにかかっており、独立した三部門的なものというよりもむしろ、ペリコレーシス（相互内在）的に相互に深く結び合わされた関係性で理解されている。²¹ そこでの人間とは単独無比のモナド的存在ではなく、創造のはじめから複数性において造られた人間であり、かつ「自然の一部」として生きている人間である。そのいのち・生活・一生は神の被造世界を舞台として営まれていることが無視されてはならない。その舞台たる自然世界もまた神の恵みにおいて造られた被造物であり、神と人間と共にかかせない神学的ピースになる。この三連構造を貫徹しているのが恵みの神学であり、「神と恵み」、「人間と恵み」、そして「自然と恵み」が三連と同時に三重構造として考察されるべき提案になっており、さながらそれは「恵みのみ」の再検証を促していることにもなっている。

ペスト禍において、ルターが神を前に考える際、その神は自然（世界）に働きかける恵みの神であり、20世紀においてシトラーが「恵みと自然世界」との結びつきをあらためて強調した連続性がここに見られる。²² 書簡において、そのルターの視点は「身体・業・知性」の被造性への言及に集中しており、実はそれがペスト禍にどう向き合うべきかという勧告の骨格をなしている。

「身体・業・知性」の被造性

ペスト禍におけるルターにとって、「身体・業・知性」とはいずれも神の創造にかかわるものである。身体は魂の牢獄のようなものとして扱われたり、心に対する肉体といった低位に置かれる精神主義に規定されるものでもない。信心、即、隣人

奉仕（ディアコニア）で見てきたとおり、自他の身体とは神の被造性を帯び、尊ばれるべきものである。さらに身体を配慮（ケア）することは、神奉仕の場となり、その配慮と気遣いはいのちの隣人性の故にいのちを守る行動にあたる。これは当時、信仰を理由に予防を軽んじ、薬の服用を怠る考えをルターが斥ける根拠になる。逃げようと逃げまいと、自他ともに身体を配慮し気遣うことはルターにおいて人間のニードであると同時に、それは神奉仕に関するものとなる。それは「逃げない」でいのちを守る行動をとる人々だけでなく、「死を避け、自分の命を救おうとする本能」もまた神さまが与えたものであり、禁じられるべきものでもなければ、隣人愛に反することでもないことが述べられている。²³

その観点から、予防を軽んじ治療を怠ることこそが、神学的にも問題なのである。「何故なら、神さまは、私たちが自分たちの体調を整え、生き生きとさせるために肉体を管理し、ケアさせるために薬をお造りになり、また私たちに理性をお与えになっている」からだ。²⁴ このようなことを認める代わりに神の名を口にして、自分の身体を守るべき処置も取らないものは、「他の人に病気を感染させ」、従って「彼は隣人の死に責任がある」と極めて強く非難している。そのような信仰的ヒロイズムについて、さながらそれは町全体が火事に包まれるさまを放っておきながら、「もし、神さまが望まれるならば、神さまは水や、消火活動なしに町全体を守ってくださるだろう」とうそぶくに等しい、というのがルターのここでの考えである。

この身体・薬・知性が被造物とみなされることは、そこから神の委託と召命を捉え直す視点のためにきわめて重要な神学的認識論を提供する。人々はルターに、「ペストの脅威から人は逃げるができるかどうか」を聞いたかもしれないが、ルターは逆に人々に問い直しをしていることになる。人はペストから逃げても（逃げなくても）、逃れられないものがある。自分の存在とその置かれた状況で「神の召し」が何であるかを考

え抜く理由になり、託されているのは自らの身体だけでなく、隣人の健康をめぐり、「身体・薬・知性」をどのように用いるかも問われているのである。したがって、召命の神学は、この健康の神学に接続し、自他の身体に配慮し、生命を慈しみ、そして病むならば医学医療をはじめとする知性とその成果たる薬を求めることが勧められることになる。

5. 結語

ルター神学には、一人ひとりの人間を見つめるまなざしがあり、その一人ひとりで構成される社会を見つめるまなざしもある。しかしながらペスト禍やコロナ禍といったパンデミックにおいては、個々人がペストに罹患する個々人の健康問題から、たとえその人が罹患しなくとも隣人との間において注視すべき社会的次元に加え、もうひとつさらに見つめられていた事柄がある。ペスト禍にある個人を超越し、また人間社会を超越する次元である。いわばウイルスが「襲来」と言われる通り、人間とその社会の外延を指し示している。いわばウイルスは私たちの生命にある越境性を切迫した状態で教える。ペスト禍におけるルターは生の外延を踏まえ社会の外延をみつめていた。神のいのちを見つめ、神の言葉を聞くとは、このような事態に対応した神学行為であり、信仰の知恵に属する事柄のように思われる。

このような神学的な知恵、すなわち多元的に現実を見ていく仕方は、ペスト書簡という切迫かつ深刻な事態に差向うときにも一貫しているし、この点がアガンベンと通底しているところなのかもしれない。ペスト書簡を読み解く鍵は、単純化の否定にある。私たちは切迫した状況で、緊急性があればなおさらであるが、思考と選択の単純化を好む。場合によって知性を鈍らせ、他人に選択をゆだね、議論を封じることこそが、生存の条件であるかのように思い込むことがある。決して事柄を単純化しない、一様ではないルター神学の多元性は、いのちの多元性に対応している。それは神がお造りになり、隣人と共にわかちあうのちで

あるがゆえに、その守る行動もまた一元的な管理などにゆだねられるものではない。

このような見解から、ペスト書簡において、逃げて逃げなくても逃れられないものとして死の問題が視野に入る。ペストが死をもたらすという問題でもあるが、ルターから学ぶのは、私たちのいのちとその営みには超越的なものがある、ということになる。16世紀において、ペスト禍も、悪魔も、死も、そして神も超越的次元として捉えられている。もしそこで死を見つめるならば、それは1人称の「私の死」でもあり、社会問題としての「わたしたちの死」でもあるが、それは「神を前にして神に造られたいのちの死」の問題でもある。ペスト書簡で「ディアコニア」が語られているのは驚くべきことではなからうか。ディアコニアは私たちお互いの互助的なニュアンスを突き抜けており、単に「奉仕」と訳するのでは誤解の恐れがある。本稿の考察を通して、ディアコニアが従来の隣人愛や奉仕の指示する内容だけでなく、むしろパンデミックにおける新しい生活様式（モード）を探し求める現下において、あらためて生の様式（モード）を考え直すキーワードになる。やや結論を急いで粗雑に言えば、人が逃げようと逃げまいと依然として逃れることなく厳然としてある問題は多元的現実を伴ういのちの問題であり、ディアコニアはこの問題を切り開く十全な概念になるだろう。私たちの生のあり様（モード）は、これまででも、そしてこれからも、神と共に生き、隣人と共に生きるいのちのあり様（モード）に立ち戻る事柄となる。そこでディアコニアとは、どの人も神の世界において神のいのちを生かされており、その問いの前に立たされていることを証言する働きとなる。それはペスト禍と同様にコロナ禍においてもまた変わることのない励ましにもなるだろう。

ルターの場合、それらは教育的・道徳的問題に終始することでもなく、科学的で技術的な解決でもなく、あくまで神学的な課題でありつづけた。それは死を内に含むいのちの問題であり、神を前に、神の被造世界にある恵みを踏まえて、考える

べき事柄であるからだ。そしてこれこそが教会に託せられている固有の奉仕となる。それはもう一度私たちが祈り、み言葉に聞くこと、聖餐にあずかること、この単純な繰り返しとその継続が、パンデミックにおいて人類に何を意味するかを考えなおす課題ともなるであろう。

注

- 1 ジョルジョ・アガンベン「エピソードの発明」高桑和巳訳『現代思想』48-7、2020年、9頁。
- 2 アガンベンの警鐘をいち早く国内に内容を伝え、ブログ上の「炎上」状態をふくめその内容に注目し伝えたのは哲学者の國分功一郎であった。筆者自身がそれを知ったのは、4月26日に東京大学UTCPが主催したオンラインワークショップ「遠隔教室 大学におけるオンライン授業の課題を検討する」における國分氏の発言からであった。それから半年後、國分氏がゲストとして大澤真幸と対論する形でさらに詳しく論じられている。大澤真幸『コロナ時代の哲学』左右社、2020年。
- 3 「剥き出しの生」は生命維持を目的とする生命（ゾーエ）だけが認められ、その他の社会的政治的あるいは宗教的に生きる価値がある生命のあり様を剥奪された囚人、「ホモ・サケル」の生のあり様を表現した。アガンベンは古代ローマにおけるこのような生命の縮減されたあり様を論じているのであるが、当然それは現代人の生に照射されるべき問題提起を含んでおり、哲学の問題系としてアーレント、そしてフーコーと論じられてきた内容の系譜として注目されている。ジョルジョ・アガンベン『ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳、以文社、2003年。
- 4 アガンベン「エピソードの発明」、20頁。
- 5 大澤『コロナ時代の哲学』、52頁。
- 6 アガンベンはその短評において、死者の権利や隣人なるものの抹消に並んでデジタル・メッセージの問題も提起し、次のように締めくくっている。「諸政府がこれまで実現に成功してこなかった実験、すなわち、大学や学校が閉鎖され、授業がオンラインだけでおこなわれ、政治的もしくは文化的な話をする集会がこれを限り中止され、デジタルなメッセージだけが交わされ、いたるところで機械が人々のあいだのあらゆる接触—あらゆる感染—の代わりとなりうる、という実験である」。本稿ではこの重大な問題について全く取り上げることができなかったが、ルター神学、とりわけ聖

- 餐論においけるリアル・プレゼンスや礼拝における「集い」の問題において十分に接点を見出される論点になると考えられる。ジョルジョ・アガンベン「エビデミックの発明」高桑和巳訳『現代思想』48-7、2020年、21頁参照。
- 7 石坂尚武『どうしてルターの宗教改革は起こったか ベストと社会史から見る』ナカニシヤ出版、2017年。
 - 8 T.G. タッパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』内海望訳、リトン社、2006年、308頁。この言葉は1529年にニコラウス・ハウスマンに宛てた手紙に見られる。そこで病氣そのものよりも恐れる精神状態がおよぼす肉体への影響を述べている。
 - 9 ベスト書簡は、ワイマール版は *Ob man vor dem Sterben fliehen möge* in WA23, (323) 339-379に、Luther's Works は *Whether One May Flee from a Deadly Plague ? (LW43)* に収められている。
 - 10 T.G. タッパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』、312頁。
 - 11 同書、300-301頁。引用されたIテモテ4・8は「信心は、この世と、来るべき世での命を約束するので、すべての点で益となります」(新共同訳)。
 - 12 タッパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』、304頁。
 - 13 ジョルジョ・アガンベン「感染」高桑和巳訳『現代思想』48-7、2020年、19頁。
 - 14 聖書のディアコニア(奉仕)は、人間相互の互助的な行為を指し示しているが、同時に人間の承認を超えたところに由来する神学的次元が維持されている。たとえば、マルタのもてなしもディアコニアであり、マリアの「耳を傾ける」行為もまたディアコニアである。また使徒言行録6章における、み言葉の奉仕もディアコニアであり、食事の世話もまたディアコニアである。いずれの例も、神に由来するディアコニアという次元が忘却されると、どちらのディアコニアが偉いか、ホンモノか、という社会的次元における優劣に視点が移行する。ディアコニアの真正性を突き詰めると、私たちの社会的承認にそれが依拠しないことに気がつくべきであるし、社会貢献となるディアコニアは物事の一部にすぎないことを揺ぎ無く主張しているのがこれらの聖書箇所に見られ、神に由来するという一点を外す時にキリスト教的ディアコニアは、逆説的に、その力のありかを見失うことになるのではなからうか。
 - 15 タッパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』、296頁。
 - 16 Martin Luther, *Whether One May Flee from a Deadly Plague* (1527), *Luther's Works* vol. 43, edited by Wiencke K. Gustav (Philadelphia: Fortress Press, 1968), 134.
 - 17 LW 43:137.
 - 18 LW43:136-137.
 - 19 LW43:136.
 - 20 Joseph Sittler, "Called to Unity" in *the Ecumenical Movement: An Anthology of Key Texts and Voices*, edited by Michael Kinnamon and Brian E. Cope (Geneva: WCC Publications), 288-290. これは1961年、インドのニューデリーで開催された世界キリスト教協議会(WCC) 第三回総会の講演原稿の抜粋である。
 - 21 Joseph Sittler, *Gravity and Grace* (Minneapolis: Augsburg Fortress), 1-3.
 - 22 ルターの被造性への注目と強調は繰り返し指摘されている神学トピックになる。代表的な例は『大教理問答』第2部<使徒信条>第一条解説を参照。
 - 23 タッパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』、293-295頁。ここでルターは、人が「日々の糧を求め」、「身体と命を守ること」はなにも罪深いことではなく、また命の危険を感じ、恐れ、そして逃げることも自然なことであると述べている。さらにこの点について、旧約聖書の数々の事例し「逃亡の神学」を展開している。しばしば逃亡することを通して神の守りが示されて、御心の成就が見られることを引き合いにして、逃げることは「神さまと隣人に対して敵対することでもありません」と明言し、こんにち的にも意義深い逃亡の神学を記している
 - 24 同書、304頁。

Luther and Agamben on the Mode of Life under Pandemic

Arata Miyamoto

Italian philosopher, Giorgio Agamben, referring to “our neighbor has been cancelled,” points to the deepest abyss of our conditions under covid-19. This paper sets out to reconsider Luther’s letter for deadly plague in the 16th century from the perspective of Agamben’s insight to life for covid-19. Regarding serving neighbors as a service to God in his letter, Luther succeeds in reforming Christian traditional concepts such as prayer, love and service to neighbor in the way of contextual theology. From the viewpoint of the letter for deadly plague, “life together with our neighbor in the presence of God (*coram Deo*)” is also radicalized from merely a religious-moral discourse to the mode of existence of life. Our neighbor is not merely the other for which someone loves and serves, but rather Christ within us that works for and serves the neighbor.

Keywords: Agamben, Luther, pandemic, plague, neighbor